

大学志望動機と試験結果に対する 原因帰属が学業成績に与える影響

松田 浩平*・佐藤 恵美**・中山 智恵***

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between the motives to enter university and attribution to examination results that affect academic achievement. The examinations for intelligence test and questionnaire of motives to entering the university, and motives for choosing the department of psychology were conducted twice. After the first examination, a questionnaire concerning study style for examination, motivation to study, and attribution of examination results was administered. As a result from factor analysis and hierarchal cluster analysis, students fell into five major clusters of motivation, and into three major clusters of attribution.

The results display that students' who possess brash autoeroticism and insufficient motivation have a negative approach towards learning. It is suggested that support about the learning method that accepted the teachers' ability is necessary. Support by the learning method is about the support in adapting to test preparation and learning at the university. It is also suggested that it is necessary to let the first grader of the university recognize 'you' about the difference in senior high school and university without yielding to difficulties of the problems with students.

Key Words: motives to enter university, attribution to examination result, cluster analysis, academic achievement

はじめに

大学入学時、学生はさまざまな理由で大学に入学し、学習一般および専門的な教科などの学習に対して興味、関心を抱いている。

* 人間学部心理学科

** 白百合女子大学大学院文学研究科

*** 大学院人間学研究科

動機づけは、目標を中心にした一連の情報処理の過程であり、個人が設定する目標やその意味づけによって目標に到達する手段・方法・過程が影響を受け、結果的にさまざまな行動が生じる（宮本,那須,1995）。このため、目標の違いは達成行動パターンに影響し、さらに結果の成功・失敗の認知により、結果に対する原因帰属や次の課題への達成動機が生じる。

学習一般および専門的な教科の学習に対する動機づけは、学習活動に直接関わりを持つ動機である学習動機（杉村,1985）、達成動機、そして大学への志望動機によって授業に対する態度などの要因によって学習に対する動機づけが決定され则认为る。

学習動機は、動機づけそのものというよりも、学習行動を規定する重要な動機づけの下位要因であり、課題や教科内容、学習態度などの要因と関連して学習行動に反映される。このため学習動機は、学生が積極的に教育活動に入っていく、共感の活動や要求に順応することである（林, 1982）。これは義務教育からの学習習慣によって規定されるところが大きいと考えられるが、学習習慣や学習に対する態度は、試験成績を規定する要因になると考えられる。

達成動機は、優れた水準で意義あることを成し遂げたいと思う気持ちであり、この達成動機が生じることにより、学業やスポーツなどに対する姿勢が形成され、成績や結果として反映される（Weiner, 1980）。また、達成動機づけ研究の観点からは、達成目標として能力を高めることや能力との関連で目標を考える研究がある（Nicolls & Dweck, 1979）。すなわち、勉強やスポーツなどモチベーションが関係する行動には、一見同じように励んでいてもその目標には2つの違った方向がある（Dweck, 1986）。勉強や学習への方向性は「成績を目標」にするか、「学習を目標」にするかであり、これらの目標はその人の持つ知能感を反映する。すなわち、目標の持ち方によって、達成行動が異なるためにその人の動機づけやその後の行動が変化する。

しかしながら、大学1年生のような入学したばかりの前期試験では、過去の課題経験が少なかったり、勉強に対する、直前の試験成績の結果によって動機づけが行われることがある。試験の成績によって次の試験に対する達成動機が規定される時は、原因帰属による達成動機となる（Weiner, 1980）。原因帰属は、行動結果についての原因を自分自身で模索することによって、次の行動に対する動機づけの強さが左右されるとしている。ここから、知能と原因帰属について実際の試験成績との関連性を検討した結果、重回帰分析において中間、期末試験の成績と京大NXとの回帰式は有効であったが、試験成績と知能との関連性は認められなかった（松田・佐藤・地頭・田中・田原・森, 2006）。

さらに、大学1年生には大学への進学動機によって試験成績が規定されることを考慮し、大学の進学動機から達成動機と原因帰属を検討した結果、大学への進学動機と大学入学後の試験成績は関連性が認められないことが示唆された（佐藤, 2007）。これは、大学への志望動機だけでなく、授業に対する学習姿勢や知能によって、実際の試験成績や学習に対する動機づけが決定されることが示唆されている。

そこで、本研究では、大学生の入学動機、学科選択動機そして学習状況を大学志向性として、試験結果と知能との関連性について検討する。学科を心理学科学生に限定し大学志望動機と学

習状況による課題への学習方略から、試験への達成動機と原因帰属について検討を行う。また、実際の試験結果を認知した後の原因帰属による次の試験への動機づけの観点から、その後の試験結果と知能について大学志向性と試験への原因帰属の観点から検討を行う。これにより、具体的な学習活動に影響を与える要因を探り、学生指導の基礎資料を動機づけの観点から研究を試みる。

目 的

心理学科学生における大学志望動機と学習状況による課題への学習方略から、試験への達成動機と原因帰属について検討した。本研究では、大学への進学動機と学科選択動機、入学後の学習スタイルを加えて、入学後の試験成績を検討した。さらに、試験結果への原因帰属と試験成績を検討し、大学志望動機と試験結果の原因帰属が学業成績に与える影響について検討した。

方 法

【被験者】心理学測定法Ⅰを履修する心理学科1年生95名であった。そのうち、アンケートの有効回答数は83名（男34名、女49名）であった。

【授業概要と試験内容】授業は測定法の心理学科の必修科目として、数的処理の基本的な技法と心理的変数の基本的な性質を数式の操作を含めて具体的に学習することを目的とする講義科目であった。

【質問紙】

[進学動機に関するアンケート]大学への進学動機（37項目）を2件法で答えてもらった。

[知能検査] 京大NX（荻阪・梅本,1984）。

[学習実態アンケート]

アンケートA: 普段どのくらい勉強しているか、試験前にどのくらい勉強しているかなどの学習状況と、中間考査の予想点数と期末考査の目標点数について10項目を答えてもらった。さらに、達成動機測定尺度23項目（堀野,1987）を4件法で答えてもらった。さらに大学への進学動機38項目および入学動機24項目（西野ら,1985,2003）を加え3件法で答えてもらった。アンケートB: 中間考査の得点への満足度を5件法で答えてもらい、中間考査の得点に満足した／満足しなかった理由として15項目を挙げ、試験結果への原因帰属を検討した。

【手続き】

1. 心理学測定法Ⅰの中間考査実施（2007年6月15日）
2. 京大NX15（2007年6月22日）
3. 学習動機調査票実施（2007年6月22日）：心理学測定法Ⅰの中間考査を返却する前に、入

学動機アンケートとアンケート A を配布し、自分の得点を予想してもらい直ちに回収した。

4. 心理学測定法 I の中間考査返却（2007 年 6 月 22 日）：採点済みの中間考査答案を返却し、自分の点数を確認した。

5. 原因帰属調査票実施（2007 年 6 月 22 日）：点数を確認した後、アンケート B を配布、自分の予想と比較して、中間考査得点の満足度と難易度ならびにその理由について答えてもらった。

6. 心理学測定法 I の期末試験（2007 年 7 月 27 日）

結 果

中間考査得点、期末考査予想得点、期末考査得点、京大 NX で算出した IQ の平均値と標準偏差を算出した（表 1）。中間考査の平均値は 62.9 点であった。中間考査の結果を返却後に予想させた期末考査予想得点の平均点が 73.2 点であったが、期末考査の平均得点は 69.2 点であった。京大 NX15 の知能指数は 98.9 であり、中間考査の直後に行った集団式知能検査の結果としては妥当なものと考えた。（なお、対象となった大学における試験評価基準は、100 ～ 90 点を「秀」、89 ～ 80 点を「優」、79 ～ 70 点を「良」、69 ～ 60 点を「可」、60 点未満を「不可」、合格基準は 60 点以上であった。）

表 1. 試験成績と予想得点

	n	μ	σ	Median
中間試験	81	62.9	21.0	65
期末予想得点	83	73.2	13.1	80
期末得点	96	69.2	17.7	93
京大 NX-15(IQ)	74	98.8	10.3	97

（1）大学への進学動機についての因子分析

大学への進学を決意した理由 37 項目について最尤推定法で因子抽出を行いバリマックス回転により単純構造を求めた。この結果、大学進学動機について因子分析を行った結果、自己実現因子と青春享楽因子の 2 因子を得た（表 2）。

因子 I は、（4）自分の個性を磨くために、（32）生きがいを見つけるために、（20）資格取得のため、など 16 項目の負荷が高かったため自己実現因子とした。因子 II は、（10）開放感を味わいたいから、（25）自由を求めて、（13）周りの人が進学するから、など 8 項目の負荷が高かったため青春享楽因子とした。

（2）大学の学科選択動機についての因子分析

大学の学科選択動機について最尤推定法で因子抽出を行いバリマックス回転により単純構造

表2. 大学への進学動機の因子分析

質問項目	自己実現因子	青春享楽因子
1 専門知識を深めたいから	.334	-.240
2 自分の個性を磨くために	.330	.260
3 将来, 外国に行きたいので	.417	.182
4 自分の個性を磨くために	.631	-.003
5 裕福な人生を送りたいので	.207	.212
6 やりたいことをやるために	.429	.054
7 大学生になって, 遊びたいから	-.018	.499
8 単なる見栄で	-.214	.517
9 本当の生き方を見つけないので	.426	.067
10 開放感を味わいたいから	.017	.600
11 親元から離れたくないので	.265	.402
12 能力の限界に挑戦したいから	.478	.048
13 周りの人が進学するから	-.277	.591
14 専門職に就きたいから	.421	.100
15 人の役に立ちたいから	.562	-.042
16 大学生だと体裁がよいので	.019	.541
17 ただ, なんとなく	-.380	.474
18 趣味や興味を活かせる仕事に就きたい	.355	-.217
19 高校卒で社会人になりたくないから	-.011	.345
20 資格取得のため	.562	.116
21 大学生活に憧れていたの	.367	.249
22 広く教養を身につけたいので	.497	-.061
23 一流(有名)企業などに就職したいので	.386	.219
24 自分の将来のために	.496	.032
25 自由を求めて	.236	.657
26 悔いのない一生を送りたいので	.607	-.126
27 自分の子どものために	.374	.132
28 大学で部活動をやりたいから	.301	.300
29 暇だったので	-.366	.281
30 自分の視野を広げたいので	.417	-.164
31 結婚に有利となるために	.194	.196
32 生きがいを見つけるために	.645	-.118
33 多くの人と知り合いになるために	.556	-.048
34 将来, 両親に楽をさせてあげたいので	.499	.093
35 大学生になって恋人を見つけないので	.138	.193
36 学問の探究をしたいから	.517	-.203
37 親や両親が行けというので	-.170	.309
因子寄与	5.769	3.322

を求めた結果、大学の雰囲気因子と、学科内容因子の2因子が抽出された(表3)。因子Ⅰは、(8)通学に便利なので、(17)地元の大学だったので、など5項目の因子負荷が高かったため立地評判因子とした。因子Ⅱは、(4)カリキュラムが充実していたので、(6)大学の雰囲気が気に入ったので、(7)教育研究設備が充実していたので、など9項目の負荷が高かったため学科内容因子とした。

表3. 大学の学科選択動機についての因子分析

質問項目	立地評判因子	学科内容因子
1 合格する見込みがあったので	.176	-.228
2 社会一般の評価が高かったので	.270	.237
3 高校の先生に勧められたので	-.049	.270
4 カリキュラムが充実していたので	-.110	.753
5 授業料等の費用が安かったので	.203	.247
6 大学の雰囲気が気に入ったので	-.051	.757
7 教育研究施設が充実していたので	.046	.738
8 通学に便利なので	.751	-.119
9 自分の適性・好みに合っていたので	-.115	.731
10 ほかに入学できる大学がなかった	-.136	-.125
11 家庭の経済事情が許したので	.099	.319
12 他の大学に比べて就職に有利	.134	.320
13 好きなことができそうなので	-.132	.586
14 希望する学科・専攻があった	-.208	.470
15 推薦入学できるというので	-.011	.145
16 教授陣が充実していたので	.109	.617
17 地元の大学だったので	.629	-.114
18 両親が希望したので	.615	.135
19 好きな大学だったので	.247	.511
20 親や親戚等に文京出身者がいた	.039	-.096
21 校舎や環境が気に入ったので	.121	.449
22 クラブ活動が盛んだったので	.397	.239
23 元女子大だったので	.020	.074
因子寄与	1.869	4.227

表4. 学習状況の実態調査項目の因子分析

調査項目	高得点期待	学習の充実度
1 普段の学習時間	.145	.297
2 テスト前の学習時間	.152	.449
3 学習時間の充足性	-.076	-.204
4 試験勉強への取りかか	-.080	-.825
5 中間考査のための総学習時間	-.093	.865
6 中間考査の得点予想	.603	.129
7 今後の学習時間の増(減)	.057	.055
8 期末考査で取りたい点数	.638	-.111
因子寄与	0.839	1.792

(3) 学習状況についての実態調査項目の因子分析

最尤推定法で因子抽出を行いバリマックス回転により単純構造を求めた結果、学習状況についての実態調査項目からは、学習動機はある種の能力感と思われる高得点への期待と、日常や試験前の学習量に関する2因子が得られた(表4)。

因子Iは、(6) 中間考査の得点予想、(8) 期末考査で取りたい点数の2項目であった。これはある種の能力感と思われる高得点への期待に関する項目であったので、「高得点期待因子」

とした。

因子Ⅱは、(4) 試験勉強への取りかかきの早さ、(5) 中間考査のための総学習時間、など日常や試験前の学習量に関する3項目で構成されたので「学習の充実度因子」とした。

(4) 達成動機尺度に関する因子分析

達成動機測定尺度の23項目は因子構造を調べるために最尤推定法で因子抽出を行い、バリマックス回転法により単純構造を求めた。この結果、最尤推定基準に準拠した2因子が抽出された(表5)。因子Ⅰは、(1) いつも何か目標を持っていたい、(10) 何でも手がけたことには最前を尽くしたい、(16) いろいろなことを学んで自分を深めたい、などの因子負荷量が高かったので、競争的達成動機因子と考えた。因子Ⅱは、(5) 他人と競争して勝つとうれしい、(20) 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う、(22) 世に出て成功したいと強く願っている、などの因子負荷量が高かったので、自己充實的達成動機因子とした。

表5. 達成動機尺度の因子分析

質問項目	競争的 達成動機	自己充實的 達成動機
1 いつも何か目標を持っていたい。	.578	.128
2 ものごとは他の人よりうまくやりたい。	.398	.492
3 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい。	.289	.108
4 人と競争するより、人と比べることができないことで自分をいかしたい。	.358	-.402
5 他人と競争して勝つとうれしい。	.217	.589
6 ちょっとした工夫をすることが好きだ。	.270	.007
7 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だと思う。	.317	-.279
8 みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい。	.513	.140
9 競争相手に負けるのはくやしい。	.243	.514
10 何でも手がけたことには最善を尽くしたい。	.599	-.144
11 どうしても私は人より優れていたいと思う。	.208	.672
12 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う。	.613	-.057
13 勉強や仕事で努力するのは、他の人に負けたくないためだ。	-.164	.549
14 結果は気にしないで、何かを一生懸命やってみたい。	.323	-.312
15 今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ。	-.106	.375
16 いろいろなことを学んで自分を深めたい。	.630	.057
17 就職する会社は、社会で高く評価されるところを選びたい。	-.239	.708
18 成功することは、名誉や地位を得ることだ。	-.095	.628
19 今日一日何をしようかと考えることは楽しい。	.462	-.133
20 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う。	-.052	.782
21 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う。	.640	.103
22 世に出て成功したいと強く願っている。	.157	.757
23 こういうことがしたいなあと思えるとわくわくする。	.336	.190
因子寄与	3.394	4.303

(5) 試験成績への原因帰属に関する因子分析

試験成績の原因帰属の項目について因子分析(最尤法, Harris-Kaiser 回転)を行った結果、

表6. 試験成績への原因帰属の因子分析

	他者への 期待	努力志向性	運・好機 志向性
1 自分にとって問題が思ったよりもわかりやすかったのだ。	-.496	.156	.210
2 自分なりに精一杯頑張った結果なのだ。	.091	.926	-.001
3 授業の内容がわかりやすかったのだ。	-.470	.253	.217
4 ヤマが当たったのだ。	.148	.150	.385
5 自分にとって大切な科目だったのだ。	.097	.420	-.128
6 細かい計算が多く、面倒で難しかったのだ。	.520	.107	.118
7 十分に試験勉強をしていなかったのだ。	.370	-.407	.060
8 授業時間内での説明が難しくわかりにくかったのだ。	.735	.120	-.116
9 試験当日は、たまたま調子が悪かったのだ。	-.075	.034	.424
10 もし、この科目を落としても卒業できそうだから。	-.063	-.061	.787
11 大学の授業レベルが、自分にとって難しかったのだ	.623	.230	.160
12 普段から勉強していたのだ。	-.218	.373	-.029
13 みんなに負けたくなかったのだ。	-.197	.250	-.141
14 試験の成績は、そのときの運にも左右されるのだ。	.110	-.018	.304
15 勉強しても、この先どうなるかわからないのだ。	.169	.123	.371
因子寄与	1.979	1.611	1.362

3 因子が得られたが因子間相関が低く直交解に近かった。そこで最尤推定法で因子抽出を行いバリマックス回転により単純構造を求め3因子解とした。試験結果への原因帰属を検討するため、試験成績の返却後、中間考査得点に満足した／しなかった原因（15項目）について最尤推定法で因子抽出を行い、バリマックス回転法により単純構造を求めた（表6）。

因子Ⅰは、(11)大学の授業レベルが、自分にとって難しかったのだ、(8)授業時間内での説明が難しくわかりにくかったのだ、などの因子負荷が高かったのだので他者への期待因子とした。因子Ⅱは、(2)自分なりに精一杯頑張った結果なのだ、(5)自分にとって大切な科目だったのだ、などの因子負荷が高かったのだので努力志向性因子とした。因子Ⅲは、(9)試験当日は、たまたま調子が悪かったのだ、(10)もし、この科目を落としても卒業できそうだから、の因子負荷が高かったのだので運・好機志向性因子とした。

(6) 因子スコアを基にした学生のクラスタ分類

6-1) 進学動機、入学動機と学習動機によるクラスタ分類

進学動機2因子、入学動機2因子、学習状況2因子について、サーストンの最小二乗法により因子スコアを算出した（表7）。因子得点はサーストンの最小二乗法により標準化得点として算出しているため、母集団において標準正規分布に従うように仮定されている。この因子スコアをもとに階層的クラスタ分析を行った結果、5クラスタが得られた（図1）。より詳細な結果を見るために、クラスタ2と3は人数が少なかったが、5クラスタで解釈した。進学動機因子、入学動機因子、学習動機因子は、図1に示す構造を持つ5つのクラスタに分類されたのだ、大学志向性クラスタとした。

[大学志向性クラスタ1] 自己実現因子、立地評判因子、学科内容の全て低いクラスタ。

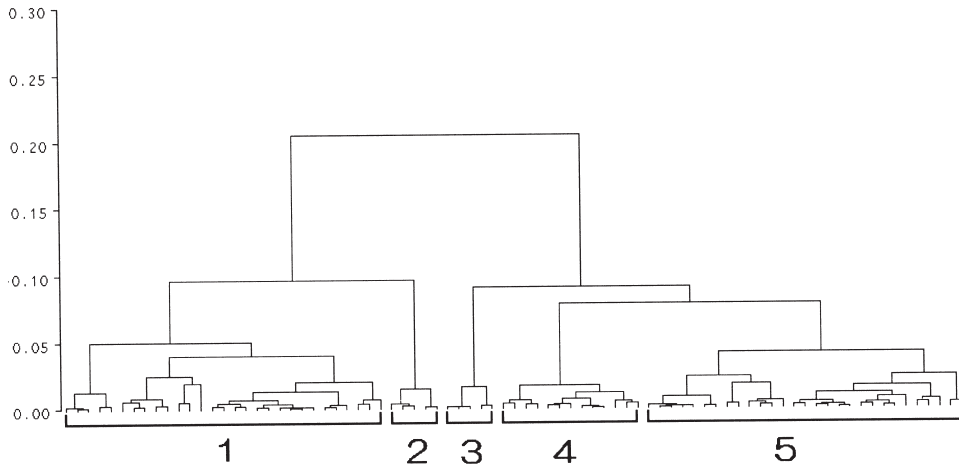


図1 大学志向性クラスターのデンドログラムとクラスター番号

表7. 進学動機、入学動機と学習動機による学生のクラスター別の因子スコア

クラスター		自己実現	青春享楽	立地評判	学科内容	能力感	学習量
1	μ	-.670	-.280	-.443	-1.034	.011	-.130
(n=30)	σ	1.011	.795	.438	.489	.744	.817
2	μ	.940	.887	-.329	-.242	.898	-1.967
(n=5)	σ	.485	.414	.587	.335	.896	.560
3	μ	1.008	.608	2.424	1.491	.278	.604
(n=5)	σ	.343	1.070	.606	.325	.279	.296
4	μ	.185	1.123	-.171	.594	-.488	.661
(n=13)	σ	.779	.795	.531	.479	.379	.374
5	μ	.207	-.504	.169	.491	.005	.069
(n=29)	σ	.594	.493	.715	.472	.815	.816

[大学志向性クラスター 2] 自己実現因子，青春享楽因子，能力感が高く，学習量が低いクラスター。

[大学志向性クラスター 3] 自己実現因子，立地評判因子，学科内容，学習量の全てが高いクラスター。

[大学志向性クラスター 4] 青春享楽因子，学科内容因子，学習量が高く，能力感が低いクラスター。

[大学志向性クラスター 5] 青春享楽因子が低く，学科内容が高いクラスター。

6-2) 試験への原因帰属に関するクラスター分類

他者への期待，努力志向性，運・好機志向性の3因子について，サーストンの最小二乗法により因子スコアを算出した（表8）。この因子スコアをもとにウォード法による階層的クラスター分析を行った結果，以下の原因帰属の3クラスターが得られた（図2）。

[帰属クラスター 1] 因子Ⅰと因子Ⅲの因子スコアから，他者への期待があり，運・好機志向性の強いクラスター。

[帰属クラスター 2] 因子Ⅰと因子Ⅲの因子スコアから，努力志向性はなし，運・好機志向性もないクラスター。

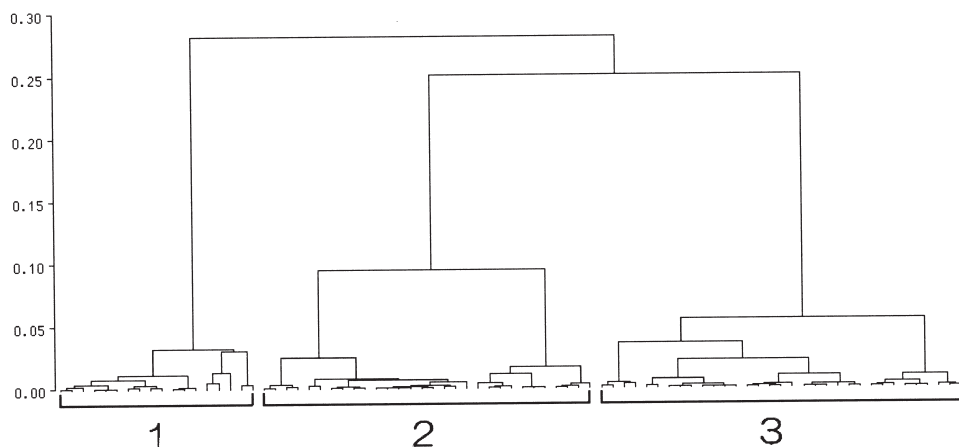


図2 原因帰属クラスタのデンドログラムとクラスタ番号

表8. 試験への原因帰属因子のクラスタ別平均値

クラスタ		他者への期待	努力志向性	運・好機志向性
1	μ	.611	-.130	1.380
(n=18)	σ	.731	.716	.498
2	μ	-.229	-.879	-.442
(n=30)	σ	.935	.500	.350
3	μ	-.138	.867	-.374
(n=33)	σ	.777	.464	.410

[帰属クラスタ 3]因子Ⅰと因子Ⅲの因子スコアから、努力志向性があり、運・好機志向性がないクラスタ。

(7) 各クラスタ分類による試験結果と京大 NX (IQ) の分散分析

大学志向性クラスタ 5 分類（表 9，図 3）と，試験への原因帰属クラスタ 3 分類（表 10，図 4）を独立変数とし，中間考査得点，期末予想得点，期末考査得点，達成動機を従属変数として分散分析を行った。

この結果，中間考査得点では，大学志向性クラスタ（ $F(4,67) = 0.16, n.s.$ ），試験への原因帰属クラスタ（ $F(2,67) = 3.17, n.s.$ ）においては有意差が認められなかった。また交互作用も認められなかった（ $F(7,67) = 1.54, n.s.$ ）。

テスト返却後の期末考査予想得点では，大学志向性クラスタに有意差が認められた（ $F(4,67) = 6.94, p < .01$ ）。Tukey 法による下位検定の結果，大学志向性クラスタ 1 と 2，大学志向性クラスタ 2 と 5，大学志向性クラスタ 2 と 4 との間に差があった。自己実現因子，青春享楽因子，能力感が高く，学習量が低いクラスタ 2 は期末予想得点 92.0 点であり，青春享楽因子，学科内容因子，学習量が高く，能力感が低いクラスタ 4 は 63.9 点であり，この間に差が認められた。試験への原因帰属クラスタでも有意差が認められた（ $F(2,67) = 3.45, p < .05$ ）。Tukey

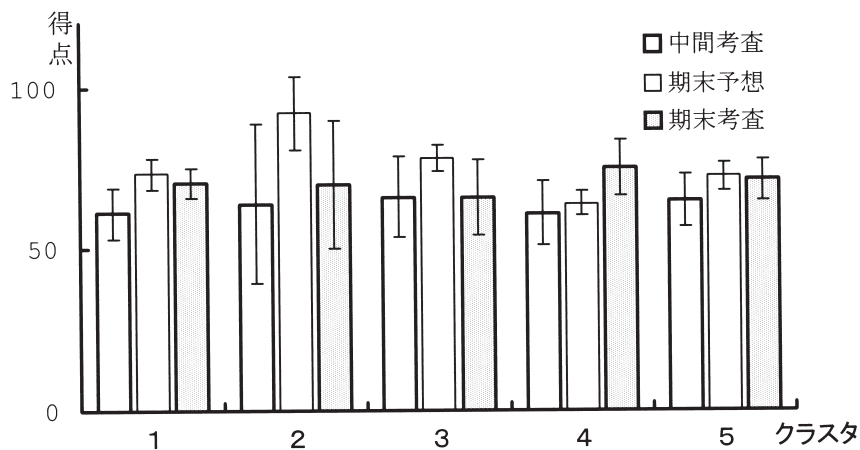


図3 大学志向性クラスタ別の試験成績

表9. 進学動機、入学動機と学習動機による学生のクラスタによる試験結果

クラス		試験成績							
		中間考査		期末考査		期末考査予想		京大NX (IQ)	
	n	μ	σ	μ	σ	μ	σ	μ	σ
クラス 1	29	61.1	(21.9)	70.3	(12.3)	73.3	(12.9)	100.4	(10.5)
クラス 2	5	64.0	(27.8)	69.8	(22.6)	92.0	(13.0)	99.7	(11.8)
クラス 3	5	66.0	(14.3)	65.8	(13.5)	78.0	(4.5)	93.0	(8.9)
クラス 4	13	61.0	(18.3)	74.9	(16.0)	63.9	(7.1)	98.8	(7.4)
クラス 5	29	64.8	(21.9)	71.2	(17.5)	72.3	(12.1)	98.0	(11.3)

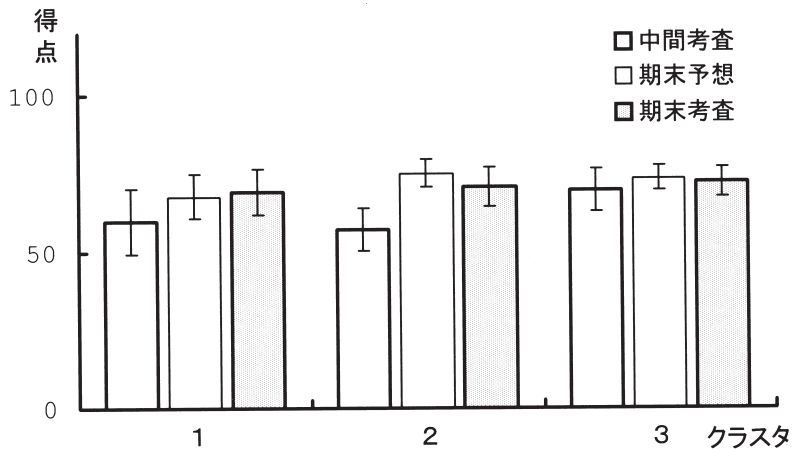


図4 原因帰属クラスタ別の試験成績

表10. 原因帰属クラスタによる試験結果

クラス		試験成績							
		中間考査		期末考査		期末考査予想		京大NX (IQ)	
	n	μ	σ	μ	σ	μ	σ	μ	σ
クラス 1	18	59.9	(22.8)	69.4	(15.8)	67.8	(15.5)	98.4	(9.8)
クラス 2	30	57.2	(19.1)	70.7	(17.6)	75.2	(12.4)	100.9	(8.6)
クラス 3	33	69.7	(20.2)	72.2	(13.5)	73.6	(11.1)	97.3	(11.7)

法の結果、帰属クラスタ 3 と 2 の間に差が認められた。努力志向性はなし、運・好機志向性もなしクラスタ 2 は期末得点 75.2 点であり、努力志向性があり、運・好機志向性がないクラスタ 3 は 73.6 点であり、このクラスタ間に差が認められた。交互作用も認められた ($F(7,67) = 2.20, p < .05$)。

期末考查得点では、大学志向性クラスタに有意差は認められなかった ($F(4,66) = 0.43, n.s.$)。試験への原因帰属クラスタでも有意差が認められなかった ($F(2,66) = 0.25, n.s.$)。しかし、交互作用は有意差が認められた ($F(7,66) = 3.19, p < .01$)。

競争的達成動機（因子Ⅰ）では、大学志向性クラスタ ($F(4,67) = 1.68, n.s.$)、試験への原因帰属クラスタ ($F(2,67) = 1.57, n.s.$)、交互作用も認められなかった ($F(7,67) = 1.92, n.s.$)。自己実現的達成動機（因子Ⅱ）では、大学志向性クラスタ ($F(4,67) = 1.68, n.s.$)、試験への原因帰属クラスタ ($F(2,67) = 1.57, n.s.$)、交互作用も認められなかった ($F(7,67) = 1.92, n.s.$)。

京大 NX による IQ では、大学志向性クラスタ ($F(4,60) = 0.69, n.s.$)、試験への原因帰属クラスタ ($F(2,60) = 1.03, n.s.$) は有意差が認められなかった。また交互作用も認められなかった ($F(7,60) = 1.34, n.s.$)。

考 察

大学志望動機と学習状況による課題への学習方略と、試験への達成動機と原因帰属が学業成績に与える影響について検討した。

試験結果は、中間考查平均得点は 62.9 点、期末考查平均得点は 69.2 点であった。中間考查の結果を返却後に予想させた期末考查予想得点の平均点が 73.2 点であり、予想得点が実際の試験得点よりも高かった。このため、予想得点が学生の学習量から生じる能力感によるものか、あるいは達成動機や試験結果を見た際の原因帰属によるものかを検討するため、大学の進学動機、学科選択志向動機、学習状況、達成動機、原因帰属、知能の要因について検討した。

(1) 大学進学動機、試験への動機づけと原因帰属の因子分析による検討

大学の進学動機の因子分析の結果、自己実現因子と青春享楽因子の 2 因子が得られた。大学の進学動機は自己実現因子が高いクラスタの人数が少なかったため、大学 1 年生は大学の勉強に対する動機づけの方向性が分化していないことが示唆された。大学生活で自己実現動機が発達することによって、価値観や個人の選択機能の分化によって動機づけも個性化されるが、1 年生は個人の興味や、社会の中で評価されるような自己実現に関する動機を持っているが、具体的な自己実現の目標を明確にしていない可能性が高いことが考えられる。すなわち、学生自身が大学に求めているものは自己実現できる何かを探索するために大学に進学している可能性が高いことが示唆された。

さらに、学科選択動機の因子分析では、立地評判因子と学科内容因子の 2 因子が得られた。

この2因子は大学を選択する際の選択要因としてとらえることができる。すなわち、学科内容が決まっていれば、立地評判因子の負荷が高い「通学に便利」「両親が希望した」「地元の大学」であることが、高校生が大学を選択する際の大きな選択要因であることが示唆された。高校生を対象に行った大学への進学志望動機は、①学校生活を楽しむため、②希望する職業に就くため、③高度な学問・資格・知識を得るため、④能力・才能を伸ばすため、⑤生活・進路を考える時間がほしいという動機で構成されている（尾嶋,2001）。本研究での大学の進学動機と学科選択動機は、1年生を対象にしたこともあって、高校生を対象にした選択動機とほぼ同様の結果が得られた。さらに、ある大学に進学する動機として、大学時代特有の経験を行いたい、自己実現に向けた目標設定のために大学に入学し、その際、学科内容が満たされていれば親元を離れずにいたいと考えていることが示唆された。

達成動機と試験への原因帰属に関する因子分析では、達成動機2因子、試験への原因帰属3因子であり、松田・佐藤・地頭・田中・田原・森（2006）の研究と同様の因子が得られた。しかしながら、本研究の学習状況の実態調査項目に関する因子分析では、次の試験に対する予想得点が高く、試験で高得点を期待する因子Ⅰと、普段から勉強していて試験への取りかかりの早い因子Ⅱで構成された。ある種の能力感と思われる高得点への期待に関する因子は、松田・佐藤・地頭・田中・田原・森（2006）の研究では認められなかった因子であり、高得点への期待に関する因子と試験前の学習量に関する因子で構成された学習状況の因子分析の結果は、期末予想得点が高かった1つの理由でもあると考えられる。

(2) 大学志向性クラスタと原因帰属クラスタによる検討

大学への進学動機と学科選択動機、入学後の学習スタイルを加えて大学志向性クラスタとし、試験結果の原因帰属を原因帰属クラスタとして、クラスタ別に試験成績と京大NXによる知能指数（IQ）を検討するために分散分析を行った。

大学志向性クラスタは、自己実現、立地評判、学科内容の全て低いクラスタ1と、学科内容が高く青春享楽因子が低いクラスタ5は中間得点、期末予想得点、期末得点ともに安定した得点であった。これに対し、自己実現因子、青春享楽因子、能力感が高く、学習量が低いクラスタ2は、予想点数は高いが、学習量が少ないので最終試験である期末試験は点数が低かった。分散分析の結果でも、クラスタ2は、期末予想得点においてクラスタ1、4、5と差が見られた。この結果により、自己評価が過剰で動機づけが不十分なまま大学に進学した者は、学習に対して消極的であることが示された。高校生の進学志望動機と学業成績に関する研究では、同じ進学志望動機を持つ生徒でも学業成績の違いによってその動機の意味することが違っているという示唆がある（淵上,1984）。進学志望動機と試験成績との関連性について深く検討する必要があるが、これらの学生に対しては、学習能力に応じた学習方法に関する支援が必要なことが示唆される。

（3）今後の方向性と学生指導に関する検討

本研究の結果から、大学に進学する動機として、大学時代特有の経験を行いたい、自己実現に向けた目標設定のために大学に入学していることが示唆された。また、大学入学後の試験は、個人の知能指数ではなく、本人の努力や目標設定によって試験成績が変化することが示唆された。これは、達成目標を身近な課題の達成目標にすることで、試験成績が高くなることを示唆している。このことから、何らかの理由で学習への動機づけが低くなってしまった学生に対しては、大きな目標設定よりも小さな目標設定を設定し、学習への方向性を明確にすることで学生の勉学に対する動機が徐々に生じていかなることが重要であると考えられる。

引用文献

- Deci, E.L. 1975 Intrinsic motivation. New York: Plenum Press.
- Dweck, C.S., 1986 Motivational Processes affecting learning. American Psychologist, 41, 1040-1048
- 速水敏彦 2002 自己形成の心理 自律的動機づけ 金子書房
- 堀野 緑 1987 達成動機の構成因子の分析 — 達成動機の概念の再検討 — 教育心理学研究, 39, 148-154.
- 林 潔 1982 スタディスキルスと大学カウンセリング 新書館
- 松田浩平 佐藤恵美 地頭沙織 田中翔子 田原理恵 森 昇子 2006 学習への動機づけと試験成績の原因帰属が学業成績に及ぼす影響 — 学習能力と性格の関連性から — 文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.8, No.1, 177-188.
- 宮本美沙子 1979 達成動機の心理学 金子書房
- 宮本美沙子 奈須正裕編 1995 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学 金子書房
- Nicolls, J.G., & Dweck, C.S 1979 A definition of achievement motivation. Unpublished manuscript, University of Illinois. Cited in Dweck, C.S., & Elliott, E.s. 1983
- 西野泰広 松田浩平 村井潤一郎 2003 人間学部入試データの多変量解析における入試のあり方の検討 文京学院大学総合研究所紀要 Vol.3, 69-85.
- 尾嶋文明（編著）2001 現代高校生の計量社会学 — 進路・生活・世代 — ミネルヴァ書房
- 佐藤恵美 2007 大学への進学動機と入学後の試験成績からみた学習への動機づけと原因帰属 ソーシャルモチベーション研究
- 杉村健 1985 小学生の学習心理 教育出版
- 苅阪良二 梅本堯夫 1984 新訂京大 NX15 — 知能検査 第2版 大成出版
- 竹内啓監修 芳賀敏郎・野沢昌弘・岸本淳司著 SAS による回帰分析 SAS による統計的データ解析 6 東京大学出版会
- Weiner, B. 1980 Human Motivation, Holt, Rinehart and Winston. 林 保・宮本美沙子（監訳）1989 ヒューマン・モチベーション 金子書房

（2007.12.12 受理）